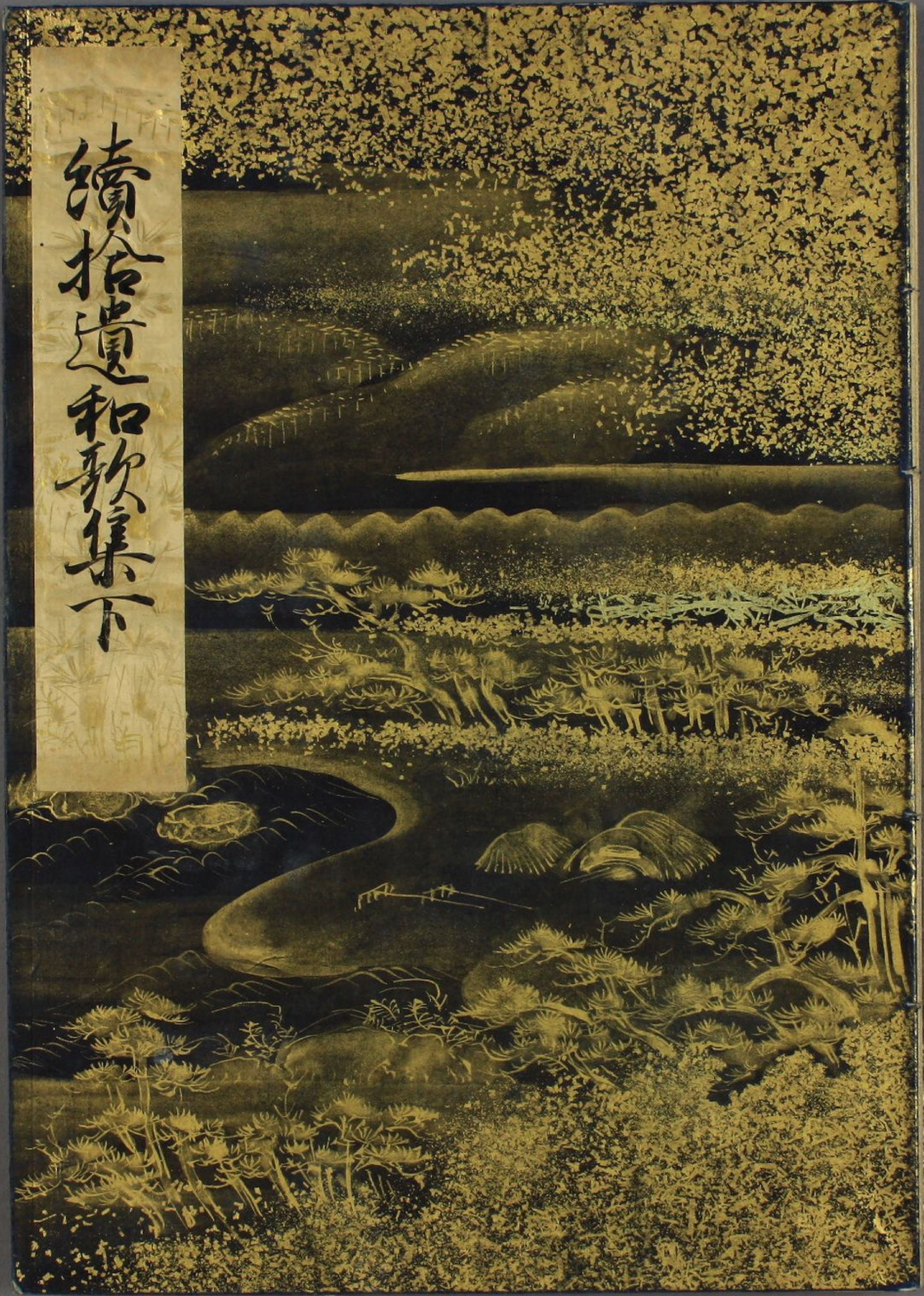
續拾遺和歌集 下



九曜文庫

續拾遺和歌集巻第十一

戀歌一

正治百首歌たてまつりけるに恋歌

皇太后宮大夫俊成

恋衣いつ小淘るきのいそならはやそてうつらんそ
袖恋のみなと

土御門院御製

もろともにいつしかしせん玉江をわけてすらの浮心あれは

弘長元年百首歌たてまつりける時おなしく

衣笠内大臣

しらせても猶つれなくはいかにせんいはぬをとかにもの思ひや恋
わし

題しらす　　内大臣　家基公

恋しさといかにしのはん涙とていはほなかさより袖の我邊

前摂政左大臣

まちわひの袖の白玉誰故にこほれてあまる涙とか云

家に百首歌よみ侍けるに忍恋

後法性寺入道前関白太政大臣

君にしくこそしられぬとしらせやとこのからには思ふなるそ

千五百番歌合に　前大納言忠良

いかにせんしのふる人へとおもひけるかな

建長二年八月十五夜鳥羽殿歌合に忍恋

前右兵衛督為教

みこもりの玉えの蘆のしけくふしひとつてほとは志られ

洞院摂政家の百首歌におもふ心を

常盤井入道太政大臣

沖津風吹しくうらの蘆の葉のみたれて下におもふそくれ

恋しらす

後鳥羽院御製

小山田のかりうしめの夕縄むすふ志ひとや有そふさ

基実少将

志ら連ふくゆ縄の跡ものこんよそみおもひあまると

建長三年九月十三夜十首歌合に寄縄

忍恋といふ事を　万里小路右大臣

志ら連ふあしくりの縄下にのみむすふおもひのせそくれ

百首歌めされし次に

太上天皇

我ゆり思ふ中にいりつ摂なりつ袖の涙なりけり

春宮大夫実兼

難波かた蘆の志たのやはおもひねよわかぬ袖さへかはきそひまもと

恋歌の中に

前大納言為家

みかり河のみきはさえねまかはふ連とたゝ小も志らせ連

宝治百首歌めしゝ次に寄滝恋

後嵯峨院御製

むかしくはなにし舟とよらなんしるへをなき袖の湊よ

寄月恋

前大納言為氏

山のはにまちて出つる月影のおもふなにもいはてせん

正三位経朝

よひのまにいらの空ゆく月に影うつりみし人はまつ

わかれし人を

土御門院小宰相

めくりみし雲井のよそに行月のおもかけはかりもしらぬわかこひ

後深草院御製

いとせめて思ふ心か袖の波とともにしほりてやとる月

忍恋のこゝろを

我涙露ももらすな枕たにまたしらすけれはまの枕

道助法親王家五十首哥に寄枕恋

参議雅経

しられしな我袖ならしきぬる夜への枕ならすはおもはね

思しらす

従二位家隆

歎くとも誰かはしらむしのふれは我ありみとも

前左兵衛督教定

つまかくるたよりもなくうき人のつらさを恋にせや

忍久恋のこゝろを

前大納言為氏

いまそ思ふ人の心のうらみしもまたよの中の命なりけれ

前大納言為家の百首歌に
正三位知家

年ふとも誰かはしらん人しれぬ心のうちにむすふおもひを

宝治元年十首歌合に忍久恋
前内大臣　師

人しれぬ思ひにしほれて枕をや袖よりさきに我ぬらしけむ

院弁内侍

思ふともいはてしのはゝわかのうらの月日をしつく人のなかさ

建長二年九月十三夜三首歌合に恋歌
民部卿隆親

ほしても又いまそ身のうさしるみのいつまて命つらしとも思ふ
思ひしらすや
入道二品親王性助

高砂の尾上の松のなにならぬ名をたにすそ生ぬるとしふれとも

建仁元年五十首歌合に寄雲恋
前中納言定家

しられしな子しらぬの末葉にこもるとも志らすに雲とみえなは

恋歌の中に
如願法師

袖の色をそのみに人はしらせしといかに洩りけるやましたのあら

宝治百首歌に寄衣恋

前大納言基良

せく袖の涙やいまはあまるらん子を思ふ身の衣深くてくちなん

文永七年八月十五夜内裏三首歌に恋意

藤原為世朝臣

いかにせんつゝむ人めにせきかねて涙も袖の色にいでなば

題しらず

今出川院近衛

思ひきや袖よりおつる涙つゝきえぬうき名の涙なるらん

寄衣大臣

かくすなよ人めせかるゝおもひ川つゝさはまの涙なりとも

従二位行家

せく袖よりいふかひなきは思ひ出の月もとしのみ我かなしき

中務卿宗尊親王

いかなれはしのふる人のひとしほに涙そめつゝくちはてなん

よそにしもひなき物から人しれぬ我のこゝろに恋しからまし

未対面恋といふこゝろを

皇太后宮大夫俊成

人しれぬなみやいつてかなしきはあはれとも見ぬ面影のまへ

洞院摂政家百首歌に

正三位知家

年をへて我さまよふはかなしきはしるやしらすやいつの雑もなし

弘長元年百首哥奉りけるに忍恋

前大納言為家

いかにせん恋はそれなるみちのくの思ひにおそやとなは

寄雲恋といふ心を　高階宗成

いまそのおもふの山まかゝる雲やかれゆくと移へらん

恋哥中に　前大納言資房

ゆくもうしは月にかゝりわかる恋をしめ思ふ心のかきりなき

女のもとに文つかはしけるに返事はなかりけれは

うへとふつてみくらへしてゆくへはつらし

けり

前大納言経房

ふかきゆむとこゝの玉章はなほさてにつきてたのまるゝかな

思ひしらす　藤原則俊朝臣

あちきなくゆくみもなきて誰ゆゑとさては出る袖ぬらすらむ

九条左大臣女

今はたゝうらみしやまし涙川誰ゆゑおもふせゝならねは

侍従雅有

涙川おふせは淵とよとむとも色にしられぬなかれともかな

千五百番哥合に　前大納言兼宗

もらしとはふかくやせきとめし涙の川のよそにもらすみ

恋哥中に

前大納言為氏

おいの後世よりしいへてせんかたの浪のうへにふかくてそ

大将に侍りける時文つかはしける人のもとへすなはち
かりけるに　万里小路右大臣

三笠山ゆくとも君かさねとの深かすまも露にぬれさらん

山階入道左大臣家十首歌に寄関恋

前大納言為家

心からかよはぬ中に関守めなにとか浪の人めもるらん

家に百首歌よみ侍りける時忍恋

法性寺入道前関白太政大臣

恋をとは浪よりしるしとかくて見てふらとも思ひけりそ

刑部卿頼輔

人しれていふことをちらすなよまくらそいふ世の枕ものを

家に百首歌奉りける時

僧正行意

なきつらきそてし袖よしるすなよいせの枕乃塵の下まて
思ひしらす

皇太后宮大夫俊成

かしてとも袖やしらまん秋ならぬ身とそこの枕に寄は

寄枕恋と云心を　太上天皇

まくらよりふと見るもとにたちてさやかのこいてそ枕乃下そ

恋歌とて

典侍親子朝臣

今更に思ひわすれといふにても見えぬ人のこゝろよいかならん

西行法師

みさほなる涙なりせはから衣かけても人にしられましやは

千五百番哥合に　後京極摂政前太政大臣

わか袖の涙にせかるゝ岩根松いはてとしふるまゝにおもひは

題しらす

鳰鳥のかくれもそなき汀まて下にかよはん恋そくるしき

後鳥羽院御製

せきとめし柵もなきに出てたつ泪の川によるゝ袖のしからみ

続拾遺和歌集巻第十二

恋哥二

題しらす　前関白左大臣一条

人しれすこそ思ひといひなさんかの煙風よみせて

常盤井入道前太政大臣

忍ふめるさ浦よりをちに立煙これそくゆるもなにゝこそ見え

名所百首哥たてまつりけるに

従二位行能

煙あまにこそ思ひけりはしめてそいそ波の浦のあまのたく火

恋哥中に

按察使高定

なきつゝもひくもとにもあふまてはあまたのよの蛍なりけり

前摂政太政大臣

下りえにむすふおもひの夕蛍そこはむしそさなりや波

前大納言為氏

いさつに立なかりけりや富士のねのもゆるおもひのかゝるらむ

権中納言公雄

甲斐かねやさやにかなのゝ夕蛍かゝるなかりにおもひ消ぬ

寛治百首らうちかひ時寒蛍といふことを

権大納言忠信

身をすてゝもおもしふ富士のね夕蛍杉立のかけにおもひかけとは

題しらす　大蔵卿有家女

蛍こそ川おきまかけにかゝるねたえぬおもひはまことゝす

源親長

遠よ立やなかりの果しらずまよひてさうさりともあさおもひ

源親行

いつくにおもひこそまてしりなくとみゆめやみえけり

常盤井入道前太政大臣

秋とくりふにあまのなかくいさり舟こきてもおもひもえてそ

院少将内侍

我恋はなくさみのなれをおもひさりのこゝろのかれも身をしらぬ

文永二年七月白河殿七百首歌に寄網恋

前中納言雅言

伊勢の海のあまのたくなは我なれや心をひかぬ人よ恋つゝ

いかならん時にかゝ女よつりしけん

後嵯峨院

由良のとも恋こととのあまのはまの枕見えとさゝは絶ゆらまし

題しらず

前右近大将彩綱

まとろめは夢にもみえぬなかつまは忘るゝ旅のつれともな

百首歌中に

前右兵衛督為教

おもかけもうき寝のつらさそへてさらにさめぬは夢ともな

千五百番歌合に　後鳥羽院御製

うらそねるよひくもかゝらめそとひゆふせ暮

題しらず

按察使高定

はかてもちはらさ捨とふとも恋しき人と夢にみえん

藤原伊信朝臣

逢とみはゆくもとひのあやしきなきさ夢はそ

藤原景長

おふとてそたのむそらくさくてねの夢ては捕はとね

平時村

おもかけにやまにいもうともあゝ夢をいふみよわ

平宣時

めつらしく小志のありしむかし荒ては葎こそはしけれ

入道二品親王家の五十首歌に

侍従雅有

我袖の涙は色の露ならてかはくまもなき枕もやそめまし

恋歌中に

権僧正實伊

わか袖にねくらいりゆくやまちなき恋のなみたそ

千五百番歌合に

前大納言忠良

恋とのみ思ひつゝやはことは露ならぬ袖はぬれまさるらん

大蔵卿有家

山かけのかりはの沢のまこも草かりにのみこそ袖もぬらさね

弘長元年百首歌奉りし時不逢恋

常盤井入道前太政大臣

風ふけはさゝ浪入江に浪こえてはらゝに露そおきあまる袖

家に歌合侍りしに

中納言家成

あさりするあまにもあらぬ我なれやしほたれまさる袖の上かな

題しらす

土御門院小宰相

我秋よ袖のしつくみえもこそ入まほしけれ山の淵

寛元百首歌奉りし時寄淵恋

常盤井入道前太政大臣

ぬきとめぬ玉ハ何となく乱れておつる露の白玉
思しらす

光明峯寺入道前摂政左大臣

年へぬる身ハ老の波を掛てわれしせこそ猶たくせや

洞院摂政家百首哥に不遇恋

常盤井入道太政大臣

消ぬへき身のいのちハいつまてと思ひ川かりそめにおもハれともみよ

弘長三年内裏百首哥奉し時寄池恋

前大納言為氏

袖ぬらす人の恨ぬ人ハかけてつらき心を池の心とそしる

恋哥中に

賀茂重保

うきやま雅の宮こえてわかためあハセと頼らん

和泉式部

見るみへてとおもふ心よはしハてとふたかりぬるかなしまハ

正治百首哥よ　正三位経家

あらしめやきしの糸の一筋にうつくしかるもつらきを
思しらす

よみ人不知

思ひとひつまとなき中ならへて恋と命とけやなきせん

文永十年七月内裏七百首哥奉し時

光俊朝臣

ならへて逢みんと命ともかなへやうまりかけん

恋のこゝろを　　従二位顕氏

あめのしたへ人の心をみつゝりもちはふ世々の命とも哉

百首哥めしける時　　式乾門院御匣

契りおきし情はかりを偲のなき世まてしてなとゝけつ哉

題しらす　　平経氏

ちきりしは末まてとこそ思ひしかそのむかしやかはりはてなん

契後恋といふことを　　藤原為世朝臣

今はまたあはすなりにし影もみてそこともしらぬ山のあなたに

恋哥の中に　　兵部卿隆親

逢ことのいつを限とたのまねは我涙さへたえてこそまね

従二位行家

あふことは風にまかする浮雲の行末とほくきえはてぬとも

宝治百首哥たてまつりける寄橋恋　　源俊平

恋わたる心は空にかよへともあふ秋すくなきかさゝきの橋

入道二品親王家五十首哥に　　津守国助

ためしやはさしも長柄の橋はしら世々の命をかけて恋渡るへき

建長二年吹田にて十三首歌よませ給ひしに

院弁内侍

あすまでの命と人は契りしにかはりはてぬるとへやあはれん

忘るらんとて

典侍親子朝臣

逢ことに誰かはかへんをしみて我身にしもつらき命を

山階入道左大臣家十首歌よみ侍けるに不逢恋

前大納言為家

今はまたたえんと契りしを今我つらの惜き命は

惜しからす

平時直（宣）

逢ことにかへん命はさきにあはまし恋しはなれてや人のつれなさ

中務卿宗尊親王

いふまでもしらぬ命のつれなさは惜からずして恋や渡らん

平義政

逢ことをいつともしらずまちわびて命にそふは思ひなりけり

藤原基政

逢までの命ともこそ頼みしにあふにつけてもをしまれてぞする

久恋の心を

平政長

あらし世をたのむばかりやつれなくて恋をよわらぬ命なるらん

百首歌奉りし時

覚助法親王

今は又おもひしらぬ身となりぬこの世よりむしろ数ならは

恋哥の中に　　中務卿宗尊親王

かくとひんむくひ人のとはてや後の世まてすつるならん

信実朝臣

これ仍人のそれつまならさも身をしらてや逢

恋ひぬるそとはしてわすれての命をたのむともかひなき

左近中将具氏

あまおふむ命なまゝりしぬつり縁にかれもつまならん

常盤井入道前太政大臣家に十五首歌よみ

侍りけるに

山階入道左大臣

思ひすゝ衰つまならさ命かはいきてしはしのたのみなれに

文永二年九月十三夜五首歌合に不逢恋

従二位行家

いきて身のつらさにたへて逢ことをまつ命とも恋やはてなむ

恋哥の中に

侍従能清

いける身のひはなきれと恋しなはおくれし世をとこそ猶やわかれん

宝治百首歌奉りける時寄恋

安嘉門院高倉

恋しなん命は人のためなれは浅茅か末の露をとひとへ

題しらす

宜秋門院丹後

恋しなはいきたりけりやと海の人我身は昔のまゝにいかにと

女のもとにつかはしける

後徳大寺左大臣

こひしなん後忍とふともしのひ出よ夕の雲はそれとなくとも

続拾遺和歌集巻第十三

恋歌三

千五百番歌合に　参議雅経

うきて身にたのめぬ涙のかゝるとや袖をつらなる秋のさき露

久安百首歌に　待賢門院堀河

つれなさをいかに忍てすくしけん暮まつ程もたえぬ心に

左近大将朝光少将に侍ける時よなよなふみをとは

すて今は涙なり我かたのみそとゝめける

小一条まゐりけるを　三条院女蔵人左近

君にまれ紅葉よろく霧のたちからぬ袖はいつかなかまん

待恋といふことを　中務卿宗尊親王

待ちわびてひとりながむる夕暮はいかに露けき袖とかはしる

久恋といふことを　安嘉門院四条

せめてわれひとつ乃ならぬあはれたのめぬ暮を待や渡らむ

百首歌奉りし時　前右兵衛督為教女

なかなかにこぬ夜あまたにこりもせで又夕暮とたのむはかなさ

山階入道左大臣家の十首歌に待恋を　前大納言為家

いつはりとおもふかひなきゆふぐれもまたとしたのむころぞや

たれなしんと　院弁内侍

思ひしや我ならぬ契のすゑをはかなくもなに人のまつとて

寄舟恋といふ心を　前摂政左大臣

ゆらしかち絶ぬ小舟さのこやうきふしよりこひわたるらむ

文永五年九月十三夜白河殿歌合に深夜

待恋　権大納言経任

あふ事のあてにむなしくふくる夜はみえてよそなる月の影ぞさやけき

前右兵衛督為教家定中ね侍りし時歌合し

偏けり小寄月恋　素暹法師

こひ人の面影はさそふひとなしぬるゝ月をかたみにて

恋しらす　前大納言資季

待侘て独有明の月かけハ別しよりもつらくそありける

入道二品親王家五十首歌に

法橋顕昭

身のうさよ思ひしらてや契りけん有明まても長月の空

恋歌の中に

中務卿宗尊親王

今こんとたのめし人の偽をいくよ有明の月にまつらん

山階入道左大臣

いまこんとたのめぬ暮の月をこそ待出るまての有明の空

権律師玄覚

待出る影さへふけしたのめても人ハこぬ夜の有明の月

待恋といふ心を

平親泰

こぬまても待ハたのまれて有明とてそ有明の月ハなけれと

影しらす

法印憲實

身のうさもしらねハ人の心しいかて待やさよ更るまて

待賢門院堀川

偽よおもひハつらせハ待来をたのむかなしさそはかなき

中務卿宗尊親王家の百首歌に

典侍親子朝臣

夢にさへ待とはなしに偽をよこそぬ人ハ我にそへとき

影しらす

前関白左大臣

逢と夢としもしれぬなからおもひあはするうつゝなけれは

寄夢恋といふことを　藤原為継

今よりの夢をそ今はたのみける人の契りもうつゝならねは

恋歌の中に　式子内親王

ゆめのまにやかてたのみつゝもゆめさめぬ夢ならはゆめにまよひ めかれ

前中納言定家

名取川いかにせんともまたしらすおもへは人をうらみけるかな

高階宗成

後まてもたのめやあらん逢ことはたえてもしらて浦のおもなみ

文永五年九月十三夜白河殿歌合に恨不

逢恋といふことを　権中納言公雄

難面とて恨ても猶おもふかなつれなさの松のねになかるれ

嘉元二年法住寺殿乃歌合に来不

逢恋といふことを　藤原道経

手枕とたのますゝりし契りをもかけてさきに来ぬ夜を

思しらす　津守国基

おもひそれねなかさけ うき をおもひやる涙しきふることをしら

近衛関白左大臣

歎きつゝおもひしよりは逢なしにひとやうきてもしのふ我身のあはれ

寄絹逢恋といふことを

普光園入道前関白左大臣

秋来ぬとけてそ結ふ下紐のとまて逢契の中絶に

弘長元年百首歌奉りける時初会恋

前大納言為家

手枕に結ふ露のかつおもはすも袖さへ露そ置まさり

衣笠内大臣

月草のかるさ帯にとけそめぬさてぬる色を誰にとはまし

秋よ恋しここらけり人へなりかへりきた

のちを待ともおもひやらまてしのみ行けり

桐摸

なくさめにゆきて逢し人もともかくやたのめるん

寄関恋といふことを

推宗忠家

逢坂や別とともに関守はいつも鳥の音ともそ

弘長元年百首歌奉りける時暁別恋

従二位行家

志ぬはかり惜き別のありつきや命にかへて思ひ知らん

洞院摂政家百首歌に後朝恋

前中納言定家

くしめりあふ別ときくかくら暁てそ人を恋ける

弘長三年九月十三夜十首歌めされし次に

月前別恋といふ心を　太上天皇

きぬ／＼の名残を月にかこちてもしらしなそてに在明の空
契しらす　前摂政左大臣

つれなくてわかるゝ袖の月影もかはらぬおもかけの（そ）

弘長元年百首歌よませ給ける時暁別恋

前大納言為家

別路の在明の月のうきにこそたへて命はつれなかりけれ

恋歌の中に

道洪法師

今そしる涙しとゝにしほれ在明の月を別の袖なみたに

典侍親子朝臣

みるとたのまぬ夢のつらさと覚えもなくてわかれしを（なれ）

中務卿宗尊親王家百首歌に恋のこゝろを

寂阿法師

ゆふつけのまねく袖はせめていとふはかなさを覚えもなはなされ（とそ）

契別恋といふことを

平清時

契りをく後を待へき命たにつきぬ限のけさの別よ

後法性寺入道関白家の百首歌に後朝恋

皇太后宮大夫俊成

別つる涙のかきりと忘せやらつ袂とゝ雨のまゝにや

隆信朝臣

床の上におきつる露の露ならもしつゝ我身そ先消ぬへき

正治百首歌に　二条院讃岐

露けさはおきわかるらん床よりも袖にあまる有明の月　ゆきわかれつる

恋の心を　後京極殿御製

我涙あふせとさりしと思ひにほとゝしらぬ袖のゝ今は

世にしりとりて行つゝけり

権中納言定家

人をまちはてぬ藤枝のまとろにおほえ夢をと今になる

恋歌中に　中原師実

さくらかゝ夢とやけさもたのましき風にみたるゝ我思ひかは

京極院内侍

うつゝとも誰かさためん今夜みて後にもつきぬ夢路を

建保百首歌奉りける時

光明峯寺入道前摂政左大臣

うつゝの夢ともわかれたまさかにてもやうつろはぬかの面影

宝治元年十首歌合に逢不遇恋

後嵯峨院下野

おとろかす人にふれは今はたゝ世は夢と誰にと逢

見しらす　平親氏

逢しくとあえかる菊とさふとおかつきさへ何かなり

行念法師

人いさしひも生ぬよるふくとわくらり菊やうゆらん

前摂政左大臣

今いくよ菊綿ふくてよ千代といひねよさしかるよ宮遷

後鳥羽院御製

しとかみ菊うつろふ色のをとゝつらしにいそでうらん

家よ百首うたよみ侍けるに

中務卿宗尊親王

いかでうつろふさとみよきんかしや昔むかしの菊のまひら

禅林寺の名を

権中納言経平

菊そともおもひたしてやみやしろ三室の菊に

百首歌奉りし時

前中納言雅言

行くかの一夜いつれ契りふとも三重ぬふ

おもふ知

平親清女

いとせあて行き契りのいろなれさすらに

文永七年九月内裏三百首歌合

藤原隆将朝臣

今よもおかね月日ハてるともいひまたふ行くさらぬ

ともしく文おき世けつねとおなふさきとみるきれ

月あかゝりける夜　和泉式部

雲ゐゆく月をそたのむ忘るなといふへき中の別ならねは

恋歌の中に　安嘉門院四条

なくさめつゝいつなかりし秋の夜もみる雲ゐの月もたえはてなん

後深草院御製

中/\に面かけさらぬねくるみてとはゆくらん秋の夜の月

弘長元年百首歌奉りける時暁別恋　常盤井入道太政大臣

いとそしも今はおもかけのこすらんわかれはかりに残る在明の月

百首歌奉りし時　入道二品親王性助

さはやとひしいつはりなれて待宵に面影つらき在明の月

月前恋といふことを　按察使高定

待わひし秋よ形見んやおもふらん忘れとちきりしなかの在明の月

右近大将通基母

夢のよもしはしとまねかむと在明の月や誰か面かけさへそみえ

典侍親子朝臣

在明は秋そかきりて逢まてはかたみとてこそ月はみえとも

千五百番歌合に

大納言通具

めくりあふ世々の契りハ小袖ぬまてこれもむかしの
うきなからへて

続拾遺和歌集巻第十二

恋歌二

弘長元年百首歌奉りける時逢不遇恋を

常盤井入道前太政大臣

あらし世よ又ハ逢瀬となきかたりこりぬまさきもれよ猶ハ
むしらす

前大納言為家

忘るへきしるハ我身の涙にハよふかるふ逢ことそなさき

前内大臣 基

今ハさて忘れんと思ふ逢ことをわれとよしもかく風そ吹

平親清女

はつかにとりし通ひハ絶し夕暮を今ハよその月も契らす

文永二年九月十三夜五首哥合に絶恋

従二位行家

多通ハ人乃昔になりはてゝ我身にかゝる夕暮の空

九月十三夜五首哥合におなし心を

前大納言良教

おもかけのたゝそのまゝのみちふれハ人の心そ雲となりけれ

寄関恋と云ことを

権中納言具房

うらむとも思ひもそめぬ逢坂に又逢坂の関そへたてん

洞院摂政家百首哥に逢不会恋

藻壁門院少将

逢ことのたえ行ならハつらさとも思ひ捨の契なるらん

恋乃心を

君ハ人を思ひもよらし通ふらんこよひの月に我そあはれと

文永五年八月十五夜哥合に月前絶恋

太上天皇

なにとなく思ひたえてもなかめけれ月みるたひに袖のぬるらん

家に哥合し侍けるに

権中納言長方

待しよりおもひたえてもくるゝ山のはにいつる月をこそ見れ

春月恋　祝部成茂

いかにせん月のとかとは思へともかすむ面影におほつかなさを
あはれし心を　道生法師

恋してかのかふへとこそ月のまてにまちさえかなかみ
後法性寺入道前関白家百首歌に旅月増恋
とふらくと　正三位経家

旅ねは恋こそまされ都をはつきせぬや月はそてぬらしけん
題しらす　土御門院御製

恨ても人の心をとけやらて袖のこほりに春はさえぬると
藤原為兼（宣）朝臣

三とせにもよ我はまさりける月のかけのみにこそなみたなりけれ
読人しらす

我恋はまくら露さえぬ草葉にもおもふとそ出ぬ下にのみこそ
典侍親子朝臣

あかなくも袖にと匂ふ梅かえに思ひあかしはむ曉のそら
春の比梅やそめけん人の梅の花を折てさし
をかせ給へる文のそへしおかしてよみ
侍りける　前中納言定家

心こそあくかれにけれ花のかに梅の折りに春のあけほの
我のみやはるを思ひん梅かえのもるかけくもれ春のよの月

こしひ給ひつれとことにこそすゝまふけゝ世よ
かゝりて　　　お中納言通房

うき月をはこそ思ひとも思ひてのきれもちらんとひそらん
寄歎冬恋と云ことを　前中納言雅言

山吹のもはらへにほふさくらのはなになれはこそひそめん
恋の歌の中に　源有長朝臣

しらせはやおもはむすゝこ年こそあふさきにそのとけてまし
見ぬ人の日人をりしにつけてひとつにそへてくれ
かゝりける　　祝部成茂

あふひてふなのあはれにさきにはやけのくさむすふよみ
よ

夜秋恋　　右衛門督實氏

夏衣ゆくゝみむすとてもあふ人にかはらてしものは

建仁二年恋十五首歌合に寄夏恋
皇太后宮大夫俊成

ふるさとや萩を袖かさき夜もすゝみのはなかりのうへにまつ
思月かけりて小萩のひそめけるかのさ月をまて思
きかしつらゝけ　　実方朝臣

思ひねの袖にかはるへしやなかるなみつきてうしといなかきは

白河殿の七百首歌に寄沼恋
後嵯峨院御製

くれぬまおもふあやめの我なれや袖さへぬれねとまつかな

折ことにまちまちしふけつる人の五月五日花よ
菖蒲をとりしかへさありけるをとて

赤染衛門

かくしもなき独ねの手枕よりもあやめ添ひてやぬれまさるらん

ひさしくありけるをとこに五月六日人よりつかはしける

周防内侍

けふもまたかりそめなりしあやめ草屋てかはらぬ

恋哥の中に

前大納言為定

夜半の月のありとしぬは我中にさへ人のけしき

とふ螢それかあらぬか玉のをのたえぬばかりに物思ふころ

源家長朝臣

法眼慶融

ほのめかす我思へ身にあまりておもひある螢よりもなほまさるらん

寄蝉恋といふことを

丹波尚長朝臣

夜衣とりかへ蝉のはよりもうすきや中なかまさるらん

題しらず

よみ人しらず

恨てもひさしかれはや夜衣我身よりまたきれ契りなかなか

寄七夕恋といふことを

殷富門院大輔

七夕にあえぬ心はかゝりつゝねたき逢瀬は雲なかにやよそけ

七月七日女につかはしける

権中納言公形基

かくてしも忘つき物と七夕の妹か逢夜とかに契りけん

題不知

よみ人しらす

逢ことはまれにしもこのあまの河こよひそ深きなけれ

くもりとにつゝりけり

前中納言資平

かくてあふ心ひもとけかさゝきの羽の錦もさえゝとも

中務卿宗尊親王家百首歌に

光俊朝臣

風吹はあまつふ雲のうへにのみ消て拾ふに秋の夕暮

題しらす

醍醐入道前太政大臣女

たのめとや思ひさえぬおもよひくと移妹風のまゝに吹らん

かくて人は更してこそまさりけれ人のおもひかふ

こき植ゑにくゝりはきの錦よあさら伴をそむ

てかりけり

紫式部

おもひかふそれしかなぬらの暮れ空たち遠き錦白露の色

返し

よみ人不知

いつまでとおもひけるにか萩のはかなる心をかぬれそぬへき

建保百首歌奉りし時　前中納言定家

初秋のまとろ風のおもかけにもおもひをなきまつ心

恋歌の中に　前摂政太政大臣

うらみわひ人の心の秋風に萩の下葉のいろとうつる

百首歌奉りし時

権大納言公雅

まくらとて下葉つゆけき萩か花おもひしりてやうきにまし

山階入道左大臣家の十首歌に寄秋風恋

安嘉門院四条

秋風の吹にはせくまくらとて我とふ人へとしらぬやかな

寄秋月恋　前内大臣公

月と袖の涙うつりをたのみてそ形見もつらき秋の月影

題しらず　よみ人不知

秋はきぬ人はつれなし今よりはなかき寝覚に物や思はん

従二位家隆

夢のまさに浜松かえにてなほのこるはかなき人はなかきよ

正三位知家

いつはりも人は契りきよ世の山の峰の松のはふる

藤原永光

たえはてゝもなほからぬ袖やいくよの秋にしをれて露

弘長元年百首歌奉りしに逢不会恋

信実朝臣

このはをは袖にはあへすしくるらしやかてつゆさへなるとみえらん

家恋十首歌合に寄枕恋

光明峯寺入道前摂政左大臣

時雨もり板葉の下にぬれぬれて枕あらねは袖のぬるゝひける

題不知

光俊朝臣

今そしる我とふる世の時そともしられてかゝる袖の白露

順徳院御製

このはをは我身しくれてまたのうへにあまるとおもふの秋の涙

建保百首歌奉りける時

光明峯寺入道前摂政左大臣

ときはのもとのねよふかきいろにみえて袖の時雨はかはらしとまし

右近大将道綱母

のりとよりしくるゝ空をまちかねてなとやつらきしくれなるらむ

東三条入道摂政太政大臣

よにふるの空にぬれまさりけさやしくるとゆめみらん

十月ばかり女につかはしける

前中納言匡房

秋の夜は荒たる庭のまさられハ何面乃かきをたえせさりけれ

題しらす　曽祢好忠

秋の夜乃風の寒さに神な月何面ふりはへ人そ恋しき

安嘉門院高倉

誰か又ふかき秋まとひそへんよふく秋風さとまれなるハ

宝治百首歌奉けるに時寄鳥恋といふことを

院少将内侍

いふせんおまちえるかね契のことわりと驚かれぬる鳥

建保五年内裏歌合に冬恋

参議雅経

涙せく袖のおもひとさなくても秋のちきりハ

後しらぬ哉

續拾遺和歌集巻第十五

恋哥五

百首哥奉りし時　春宮大夫實兼

ゆくすゑのむなしき袖は波こえて契しまのまつひそかなき
位よおもしけれ時ゝへのれのことゝも書浅
恋ともふりとは浮しまりきる涙よ

太上天皇

思ひあまる袖をも涙はこえぬなれおもひはなるゝ末の松山

題しらす　九条左大臣

逢ことはさてもいましかゝる涙のこゆるにやともなれ末の松山

後深草院大納言典侍

涙こそいはぬにせんとたのみつれつきぬるなれ末の松山

建保二年内大臣家乃百首哥よみける恋

従二位家隆

あら磯のつれ涙松下のつゝみにも恋ね涙のかよひち

建仁二年恋十五首哥合に旅恋

後京極摂政前太政大臣

ゆめまてと契りてとぬ旅寝に昔そかはる風そふく

百首哥奉りし時　権大納言長雅

忘らるゝ身ハならひの夕暮もまたれはさきね庭松せ

千鳥といふ心を　安嘉門院四条

しほ浦まちひく網のつなのなかきよも我身にかへる名にしおはゝよとや

恨絶恋　法印憲実

なひくとや契りしかの松に今はおなしき浦風そふく

建長三年吹田にて十首歌奉りけるに恋

前大納言為家

かひなしなひとよはかりの逢世をはあすまてたのむ命ならすは

題しらす　平親清女妹

見えそめてやかてかはりし心から独ねの我か枕よ涙と

従二位家隆

君ゆへとみの山かなみたを流しいまやうらみんとそみとそ

真昭法師

よそにのみなるみの浦をうつせ貝あはれ見しよはなかきいそ

いそくよ波によせしとや見えてしとやつらからり

けん人の契りに　紫式部

かけてはおもひきりぬやいつとしらさりしそよしきあさの波

題しらす　九条左大臣女

かりゆく葉の秋のなきさに恨むつらはあふことよわれ

式乾門院御匣

なにゆへとなのとるへくも色にしつくさとさてに袖のみたれ

白河殿七百首歌に寄月夢恋

前中納言資平

月夢はうつゝやまほろしなるらんとりかゝし行てかよふむなしん

道助法親王家五十首歌中に寄月恋

西園寺入道前太政大臣

月やさふこゝろとや深めし人の心も色かはりゆく

文永二年九月十三夜五首歌合に絶恋

後嵯峨院御製

いまはたゝわすれむとのおもひの中にあらましやそのつらさとも絶なから

恋歌の中に

光明峯寺入道前摂政左大臣

こりゆく恋のおもひもむなしかれつゝ成ゆく人に絶なん

百首歌たてまつりし時

権大納言長雅

なほしもあらぬ衣のうへにみえし涙さながら袖とみせばや

宝治百首歌たてまつりし時寄関恋

前参議忠定

ゆるさゝる人をゆるさぬ関守の名のせきとりかなさぬかな

題しらず

光明峯寺入道前摂政左大臣

年へぬるあまのつき橋落にふる絶ぬ中とや絶や果なん

醍醐入道前太政大臣女

別にしまぬつき橋中たえて猶こひわたる人にさへ恋わたる

大納言雅忠

すゝしやあらんよりとゝ見てみつしほもしらぬ藻はきかな

文永二年九月十三夜五首歌合に述懐

前関白左大臣一条

あはれなりや我のみかゝるおもひねの夢路ゆかりのあはれなる世は

山階入道左大臣家の十首歌によみ侍しに

権中納言公雄

しるへなき後は世中に忘れなん我のみ人となりゆくを

題しらず

仁和寺二品親王守覚

通ひこし雲中の清きさへたえてくまなく照りそ袖のなみた

よみ人しらず

よそにそ人のゆきゝ絶えとんゆくしの柱たのみきえん（よし）

権律師園範

いつまでか情なきさへいつはりのたのみをかけてしひて恋しき

文永二年九月十三夜五首歌合に述懐

光俊朝臣

うきながら忘れてみえし面影もいつの月日に限りありけん

題しらず

藤原伊長朝臣

逢ことはおもひたえにし年月のつもりにつけてこひまさりゆく

後嵯峨院大納言典侍

あひみしはさきさりゆく月とこそ見しかわすらんかは

中務卿宗尊親王家百首歌に

鷹司院帥

よそにはさりのとをさへといふちかひも心なるらん

白河殿七百首歌よみ侍る寄河恋

前大納言資季

よしあらは古河のへよ生ふる松の根にあらは人に又はあひみん

恋歌とて読侍りける

式乾門院御匣

かきえつる契とおもひて思はぬ世にも又逢ぬらんとおもひけるかな

大炊御門内大臣冬

なにへて又おもはてれ玉のをよ後の世ならは逢ならはなれ

後堀河院民部卿典侍

ひとりねしとおもひてもぬれつつも衣の袖の露かこそは

新陽明門院兵衛作

あひみしを思ひかけつつわすれねと恨みしは形見とも逢

山階入道左大臣家の十首歌よ寄湊恋

権中納言公雄

よしさらは身のうき形見とて袖ぬらすや袖の涙ならねと

題しらず

従二位行家

ます鏡うつりし影をとこそ思へぬらしけるも形見なりけり

寄鏡恨恋　　従三位光成

待しよそのよふけそそます鏡我には人のかけとはまし

恋の心を　　土御門院御製

山鳥のおろの鏡よかゝらねたらさき影そてねをそなくらん

弘長元年百首歌奉りける時逢不逢恋　　衣笠内大臣

みをいやふ神のかけそゆまれに渡つりの心なりさと
もしらす　　後嵯峨院御製

待くも猶おもひけさぬ玉のをのたえてそこらふるかなしき

百首歌奉りし時　　前中納言資宣

待のこや待こしき命なれ玉のをの年月をへてなをもせん

恋歌中に　　前関白太政大臣　鷹司

忘もせぬよな〳〵の面影を身にそへていつを待まの命なるらん

源兼泰

うしとみし人よりも猶つれなきは忘られぬ身の命なりけり

権少僧都円勇

さても猶さりともわか世をたのむかなひとそのつれなきかけぬは命なりけり

弘長三年内裏百首歌奉りし時寄草
恋　　近衛関白太政大臣

影をふる小はりかとへやそてに忘草今はつゝきき妻とならん

九月十三夜五首哥小絶恋　　権大納言實家

甲斐なしと遠そてはかりもこその我のこゝろ思ふらんなれは

文永二年九月十三夜五首哥合ニ同心を

入道内大臣　源通成公

よそまては恋ひさらに袖ぬれて物思ふまさる我涙かな

恋哥とて　　鷹司院按察

いふて契りしことの葉ハ嬉しきよりもつらさなりけれ

前関白左大臣　一条

面影をいつ忘れんと流しとも忘れはおもひ出らる

女につかはしける　　津守国基

よそにして人の心は流るかは契りしことをたのましやは

題しらす　　藤原為継卿下

いかにせん袖のとぬれて石見かたいかなるみに志つむ恋

寄海恋といふことをよませ給けり

後嵯峨院御製

こひわたる身の浦にうらむとこれも志るせは

弘長元年百首哥奉りける時　逢不遇恋

常盤井入道前太政大臣

歎しよ袖の涙色へりぬへしつらきも契りなりけり

光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合に

寄舟恋　　前大納言資季

漕出る沖津浪まにおほ小舟しらぬゆくへとさかりて

恋の心を　　中原行範

恨ても我世にかぬ絶ぬの枕はつもるさかさに恋て

中務卿宗尊親王家の歌合に

光俊朝臣

今更になにかうらみん忘草ひとふかりし人の心を

題しらす　　前関白左大臣一条

偽となほしりなから人をうらみせん忘れはてしといひしことのは

賀茂氏久

数ならは我身と思ふまも人をうらむることのなきそ

被厭恋の心を　　参議定経

憂とのみ身よりかすみ恨てさうれしといはぬ人の忘られは

恋歌中に　　前右兵衛督為教

よしやそは我身れとそふいひかさんつらきさと人の思ひ出て

従二位行氏

身れとそふ人のつれなさを思ふより忘れはてしさんかなれ

正三位重氏

手ふれしと思ひはてぬのいのちそも身にかへてたのむなり

恨恋のこゝろを　九条前摂政太政大臣

うらむへきこともなくめよりわすれしと人を恨ける哉

題しらず　今出川院近衛

後の世につれなきむくひとおもふにも人のためまてうらむ我身か

正三位知家

おちたきつ瀧乃河やいはせ山流しきら中に瀬なるらん

続拾遺和歌集巻第十六

雑歌上

建保百首歌たてまつりける時　西園寺入道前太政大臣

いにしへの昔をとをくへたてきてそのかみ山にかゝる白雲

題しらず　正三位知家

神代より年ぬくとせつりの月日とともに次天のふ山

藤原道経

年ふとも苔の滝の白糸はいかなる世まてたえしとそ思ふ

百首歌よみ侍けるに　光明峯寺入道前摂政太政大臣

家隆のあきまれみかきのうちにあらん松こそちよのためしなりけれ

白河殿百首歌よみ侍けるに松といふことをよませ給ける
後嵯峨院御製

今とみてもみつやゐなの松かれはつをふるたのしたて

中務卿宗尊親王家百首歌に
典侍親子朝臣

涙そふ時さへそてれは袖にそてかは浦の玉

入道前太政大臣家十首歌に名所松
前大納言為家

我こそも昔はともに思ひし友と老木となりし浜の松

浦辺松

住吉のたのむかけそと立よりていくちよまてかあふかさきる
前大納言為氏

ひたちなるかひ山の松とてもみてけん昔かたらむ友しらず
右大臣忠基

いかにせん我身にかゝる白波の末の松山まつともなし
前参議忠定

高砂の松もむかしに誰とかもあかれゆけきみ友ならせん
前関白太政大臣 一条

我のみかと思ひしかはいにしへの代々にもありといふなる

弘長元年百首歌たてまつりける時関
常盤井入道前太政大臣
昔よりかはらぬ中にわたしてやなかりし関のあとかれ
橋
こえわふるころの橋も橋ならず身にならへはこひわたるらん
ぬしらず
光明峯寺入道前摂政太政大臣
流よ消えて行山川の泉のうへの世をたのむらん
前左兵衛督教定
いかにせん身をやかくしも心河ささらなみのあさ瀬
賀茂社に詣てよみ侍ける
安嘉門院大弐
みちしらしや身は老つもともなき人の世よみをならす今さらに
身つくしれぬをときを待とて
藻壁門院少将
思出てなき人を思ふ人の涙こそ岩ねにかくれぬの流なりけれ
入道二品親王家五十首歌に述懐
法橋顕昭
いにしへの跡をたつねて涙こそ昔にかへる浪のたよりに
おもひしれぬと
藤原泰綱
わかれにし昔を思ふ涙こそ袖よりさきにねさめのこそなく

前大納言為氏玉津嶋社にて歌合し侍し時海月　権律師定為

わかの浦の浪の下草いかにして月にしらるゝ名をのこさまし

廣田社歌合に海上眺望　前参議教長

波の上はるかに末のいとゝゆみ浦漕たるあまのつり舟

題しらず　俊頼朝臣

侘人の涙にゝたる波かゝれや袖のうらにはよるね日そなき

藻壁門院但馬

数ならぬ身は川水にうかふ月を見るもあふよつまちて袖そぬる

千五百番歌合に　宜陽門院越前

捨やらぬ我身ひとつのうきを見よしかたに世とは思ひ捨しを

述懐歌中に　山階入道左大臣

あらましゝ秋のゝはらは君か代にやかてとゝめぬそらをしなる

菅原為綱朝臣

雑歌の中に入にうちはかきえのよやまつこそ果なん

前中納言資平

なからその身にかゝる苔の世にうきふしそしらぬ

前内大臣　基

秋にひかりのうき世をしのふの中の袖にかれそむ

津のくにゝまかりける時難波の女ともあまたあれ
りけれはつかはしける　紫式部
難波かたむまてかる蘆のとしふとも立かはるともえそしらぬかな
題しらす　源兼氏朝臣
澤よのいくへの月とふきみる雲かへらつゝ露の毛衣
好忠
暮てもおもはきしと白雲の浮世はすまねせんとは
俊頼朝臣
我心月にとまりて旅ねてもいとゝ思ひ出く立かへるらん
前大僧正覚忠

かくこもり宿のまそめはしつかにて衰へぬのは雨なきさに
楽天と　前関白太政大臣一条
世間をいとひ捨てのちまにこそて草の庵やかくれすむらん
大隠在朝市といふことを
権僧正長経
世をいとふ心はゆくとよみゆもなすさむ山のおくなるらん
題しらす　よみ人しらす
行くも猶おりやほとさ山里とうさ世かとあれはいとらん
前左兵衛督教定
人はいさよのうきかうれ山とても我心しえやはとゝまらん

平重時朝臣

うしとてもひとり山路にふかく入ぬるともをしむこの世の月をみるかな
山里にこもりてもみてしのふ侍るか

法眼良珎

うき世とは出てく入ぬる山陰に心をとめて月をみるらん
思ひしらす

法印公澄

我のみとむすひし山里に月も宿かる苔のさむしろ

法印寂信

奥山の岩まにかくれの埋水ありといはむもむすひけるかな

宝治百首歌中山家水

前参議忠定

山ふかく世をもとめぬる理にやかてさはらぬさわる心かな

弘長三年内裏百首歌中山家
庵

近衛関白左大臣

冬のつゝ都にかよふ庵とは人又かたらす嵐のみせ
秋の比山ゐるまにこもりていく侍る暁にあか

覚成法師

山ふかき松の嵐にさそはれて侍る都や猿こちせん

建仁元年五十首歌合に山家暮嵐

惟明親王

待とひぬ人ハをとせぬ葉かな嵐ハかりの夕暮にそう
影しらす　法印行清

なかつくとひこし人もとをくも小路ちつ宿のちゝ
右京大夫藤基氏

とふ人ハ岩ねの苔よりかゝ見て夜ほそふつ山陰に居
此歌ちる小とみ侍ちるに前大僧正道祐おは
きみくられ世の民よれかれ我ら袖よすゝ
深の袖とをみく侍るくと思ひてよみ侍る
前大僧正道玄

新なきしまそたのむいまへの行よりともよみ深乃袖

新日吉社の社頭にまへりて太上天皇御幸
後ろへとさて侍ちるに競るのるかとらいて
ひつけ侍ゝ　従三位光成

桜さくしきさるに花のむかしの本来乃かる下を
春縁雅経をやしとみ侍ちる家よ満りれかさ
乃柳二りとのこりて侍ゝとてよみ侍ける
侍従雅有

應にも柳木の柳いまへの名残ハ秋もおろひそちき
影しらす　前関白左大臣一条

いふせん昔に行くとあそてもなよひぬ居と植けき花

慈助法親王

秋山のはつもみぢと見ついろぞむかしわすれぬおとゞふまし
山階入道左大臣家の十首歌に秋述懐といふ
心をよみてつかはしける　前内大臣　云
かへしとてよまれしのみうら御首和歌の題乃余段ハ
高野山よりつかはしける法皇太后宮大夫俊成千
載集えらひ侍りしころきこえて言葉をおくり侍るとて
きこえ侍りけり　西行法師
なきあとの葉なりとも人のつたへとやおもひさだめて
なりけり　あはれなる
皇太后宮大夫俊成

世をとしそ今しるのことの葉ぞ数とふかき色はみえける
前大納言公任住侍りける家をたづねまかりてやりみづのもとにて
みまかりて後かのいへにまかりて人の住みけるにもあらず
ふるきにすみけるのなさけとやつりけり
けるよしに　道信朝臣
ゆかしとふかきことも形見なる今こそ世をもと遠き
よ
崇徳院よりおほせて年まつの草紙のはしにみえ　皇太后宮大夫俊成
敷島やねたみのみちにかゝるらんかゝる言葉さへ世にやおもはん
行なるり
崇徳院御製

みもすそ川にしていはゝなかきあつむらん人はみえねは
西行法師人々の歌を合せて判の詞を
侍りつきよし中将に侍りしをさそてつかはすとて

前中納言定家

山水のふかゝれとてもかきやらす君に契りをむすふはかりそ

従二位家隆千載集の世に出給ひをとつかはすとて
沈み紙に書付侍りける　因幡法師

頼みてもとりてかひもあるまし昔おもかけしてさへひたすらに
むかし

従二位家隆

いにしへの流の末はたえぬともかきつめてこそ人のあらねと

弘長元年百首歌奉りし時述懐

前大納言為家

和歌の浦におひそひはしめしそのかみの藻塩の末をとめきつるかな（めかり）
皇太后宮大夫俊成前中納言定家かさねて
続ける草子をとなりしへたつゝ人のかりけるを
長のつけをきて為氏かもとへ遣すとて

道洪法師

絶し世昔なからの跡をみて立かへりぬるわかのうらなみ
中将にて年久しくしつみ侍ける時よみ侍ける

中納言教良

行をふかくおもひなかりしよゆふへ見へたるわけし山の名さへかくて

建長五年七月三首歌よ述懐

前右兵衛督為教

さのみやはわれとふ二荒山つくりけんの名はたのまれ

洞院摂政家の百首歌よおなじ心を

藤原隆祐朝臣

位山ふもとにてらす光をしるかひもなくてしたふそ

嘉元のころ述懐の歌よみ侍ける中

に

前中納言定家

なきことを歌のいさめもむかしにかへすとおもひけるかな

花歌とて綱言へて豊明節会をおもひやりて

よみて侍けるをみ侍ける

藤原為継朝臣

契りおきし春は思ふの白げ菜みのむさとつけて又花これ

参議定雅宴にまゐりて弁官になりて侍ける時

まかりつかはしける　　源通大輔

ゆふべさへさかゆく袖のすゑとほし深き緑のすゑそむ

検非違使になりてよみ侍ける

藤原長宗

進行を深かる我袖もうきみづかりあらぬものかは

月をともへてよめる

源兼泰

ふりにける昔の袖の上におちて涙そそきけり

建長元年勅撰たにもせられたることを思ひて

とてよみ侍ける

丹波経長

ゆくへしる月は光をおくらなん我みちのくへや雲のうへにすめん

百首歌奉りし時

藤原為兼卿

つかへこしよゝの昔をしのふとも我身にたのむ光なりけり

述懐といふことを

前大納言良教

つかへこし家路はそれなからむかしの跡を雲のよそにて

弘長元年百首歌奉りし時暁を

前大納言為氏

鳥のねそ暁ことにしられける君につかふるたひそとて

洞院摂政家百首歌に述懐

前中納言定家

さらすよは世に在明の月に出てこそいそく鳥の初声

弘長元年百首歌奉りし時おなしく

常盤井入道前太政大臣

りうゝもあくひやおゝと見えやこゝひ峯あゝ
嫄のこや人

續拾遺和歌集巻第十七

雑歌中

題しらす　前中納言定家

七十のむかき月日をそへまてにかそふるまてもあはれなりけれ

左近中将公衡

ゆめおもひつゝふさや立かへりこの世にとゆかんなかれん

後京極摂政前太政大臣

立かへりたゝある世にはなれましとおもふなりひのみちやまよはん

述懐の心を

前大納言為家

おもひきやつかへしまてもかくしてのうきをなかめしことはりはなし

平泰時朝臣

愚なるはかりは道とおもふにも人のかけきと我そまされる

荘子知其愚非大愚乃心を

権中納言経平

なかなかの我身といひてすてかねんおもひとけは人さへそなき

題しらす　　式乾門院御匣

うらやましおもひいりそてやまの道我身ならぬは世なかれ

赤染衛門

ありそめぬ身にはなかなかおもひのほかの世にもふる哉

藤原為世朝臣

数ならぬ身はゆるすへきこゝろにそしるよのなかはひかりなん

平親清女

とふらはゝうきは世のなかひとつそとおもへはみなも恨やはせむ

百首歌よみ侍ける時　　入道二品親王性助

まことにそそれは世のなかはいかにとてかりそめにすてはてさりけり

題しらす　　平宣時

数ならぬ身はとかりとおもへとも捨かたき時は世をそうらむる

惟宗忠景

大かたの世をはのかれしやなくさまん我身ひとつのうき世なれは

平時遠

我袖はほすまもあらし世中のうきにまよはぬ涙なりせは

藤原興俊朝臣

ゆくも猶つきせぬ物は物思て我身よりふる涙成けり

権少僧都厳雅

うき物とおもひしれはし身なれとてなをつきぬ涙成けり

従二位家隆

しほりきし袖よりあまる涙川さそおもひやるうきける世也と

寝覚述懐といふことを

按察使高定

なかきよのねさめの涙のこほるゝはうきは我身のね覚のとこは

述懐哥とて

侍従能清

何とかく人をも今はうらむへき身のおろかさはいはてそゆかん

前内大臣 基

世やはうき人やはつらきなか／＼に身をと思ひなはこそなけかさりけれ

前関白左大臣 一条

恨むへき人へはあらぬ昔まて世をうしとしてはわすれそゆく

右衛門督基氏

身のうへをおもひなくさむ程そなき人をみるにもうき世なりけり

九条前摂政右大臣

何ことも世はむかしともおもへともそれのつらさは忘れなけれ

常盤井入道前太政大臣

老の世にむかし恋しき身のほとを思ひすてはや又歌のみち

衣笠内大臣

ありとても今いくかの行末よ我身ひとつと思ひわふらん

後法性寺入道関白家百首歌に

俊恵法師

思ひきやとしにあまりていくとせをなかき命を

惜しらす

前内大臣基

何事も思ひすてたる身そやさは命はかりに世をまかせて

従二位忠兼

何ゆゑと世にわひぬへき命とてなくてもかなと身を思ふらん

式乾門院御匣

かきりある命なりけり世にしらさりしか

惟宗行経

なからへていきると今は歎くかなうきは命のとかならなくに

法印教範

身の程にしたかひそへてつゐるともたれはかなくも命なからむ

心円法師

待とのおもひもなくとかなしやと身をも思ふ

源兼朝

今はわかるゝのおりとさりともとたのみし程のなくさめそ遠き

藤原時京

行末をたのみて世をもすくさきとはよそにおもひかねて

権大僧都乗雅

月影も程なくふかくすくさきてへてや老をかさねん

法印公朝

数くよ清遠しともいむなくて老その身をとおもひつめぬる

静仁法親王

老ぬとてみつさ涙に遠しとも心の月よはみまさりける

信実朝臣

いかにせんなかむる月のさやけさにわか身はいとゝ老となりぬる

弘長元年百首奉けるに

常盤井入道前太政大臣

老ぬとて身をもなけかし長き夜の月をもさらにあはれとはみれ

述懐歌中に

前大僧正隆弁

見るまゝに老のかけそふしるしかな六十あまりの長き夜の月

藤原為継

うきねこと老のねさめとなりにしをかくてそ月をみる秋の月

信実朝臣

こゝろぬ月のつきもやすからて老のねさめそ時なくさむる

前関白左大臣 一条

衰ぬる老のね覚の夢にいまはつらさも秋とおもはさ
昔しらす　後嵯峨院御製

いつとなくしのひの袖見えて老てもうき暁のそら

老後述懐といふことを　後徳大寺左大臣

老らくのみはいるの山の西にはいつしく宿なやそふらん

おなし心を　源仲業

うれしとかりその身にて老らくの影のとゝろまします鏡哉

寄鏡述懐　平時広

影うつる鏡を何とうらむらん老はわか身にかゝるすかたを

堀川院に百首歌奉りける時　基俊

老らくの影みるたひに増鏡猶もくもりそまさりける

述懐の心を　正三位知家

ゆくすゑと昔は末をたのみきて老そうけさにみはなれぬる

百首歌奉りし時　侍従経清

行年のつもりつもりし思ひに老はなかなかあすとそおもふ

昔しらす　西円法師

立よれは袖にあまれる浪の上月みる身は老そのるまし

前大僧正慈鎮

老にける六十余年とへてもおもひしらぬことはなきかな

藤原秀茂

うくて世をわたりしぬみそ年のあらましやつゐになき老とならん

述懐の中

静仁法親王

うしとてもおもひつゝよ捨やらてよにあまされぬみそふりぬる

普光園入道前関白左大臣

大方のうき世はいとしやいとゝまれよのつきさへそ袖はぬれける

中務卿宗尊親王家百首歌に

いくたひかおもひめくらしそむくらんゆるしく捨ぬこの世なれとも

権少僧都澄舜

あまりにもそむきはいさき世中とひとりおもひしひさしき庵

藤原長継

難くまし月日そへつゝそむきはてゝもとくとくつきにけるかな

大江頼重

何とよそむきもあへぬ世とともにいにしへ心をうらみなりけん

源兼氏朝臣

おもふとも世をそむかれきこえてうしんあつまつさ世をそ捨むね

百首歌よみ侍りける時

衣笠内大臣

そのことゝいふとなきものそむくともかく世をやおもはまん

題しらす　丹波尚長朝臣

ふかゝなけきあつめつゝ過にしはなにかはしらぬ世をもおもひすてゝ

平政村朝臣

捨やらぬ心のうちや出にけん浮世の空はりの人もなし

述懐のこゝろを　中納言教良

うき身をはひとつかはりすとはいとへ共捨やらぬ我はかなかり

土御門院小宰相

住しとて人をうらむる心へはあらぬ我心から世をいとふとて

前大納言基良

住てうき世にあるかひもなき身のうさをかすへてもおもひやはせん

寂蓮法師

あらさらや誰又月をなかめつゝ住よし人のいとひすてけん

百首歌中に　権中納言公雄

うき身をそいとひそめつるすみそめの袖には猶も思ひあまりて

出家の後よみ侍ける　藤原為顕

いつまてか世をいとひつゝ住わひぬへき命のきはまりぬらん

百首歌中に　入道内大臣

年つもり老となる身に歎きそへ今は世をいとふこゝろおきそまさりける

題しらす　信実朝臣

老てのち世をそむくともいひしかとなほきてえさる身の程つらし

終のなかき世をそむくへき道をたのまねは

従二位忠兼

そむかしと昔はいひし世中にうき時そなくさめあまりさ

守覚法親王家の五十首哥に

三条入道左大臣

住山のゆきさえきえて降ふるやとしくいはにはこほりしにけり

続拾遺和歌集巻第十八

雑歌下

懐旧の心を　式乾門院御匣

立かへる昔をしのふ思ひのなきさにつきてもねそなかれける

従二位家隆

なのつしねなかくしてもかひそなき昔をともにおもひけん

雅成親王

住ぬ道はありてうき世そなかれて思ふ昔にかへしられ

中務卿宗尊親王

うき身にはかはらぬものを世中のひとの心のむかしなりせは

題しらす

信実朝臣

我身こそありしも昔とおもふよつまて花そかなしき

源兼氏朝臣

花鳥は思ひもとをさかりにしわかいはしへの友よあらなくに

沙弥源忠

思へきる程ともしらて過てし月日そしらぬ昔なりけり

平政村朝臣

うしとこそ月日ふへくも思ひしかめくりあふこそむかしなりけれ

藤原為成

思ふ事とふへき程を待ほとも昔をいまになしもやらん

平義政

暁の寝覚よなれはそかへ我ならぬ世のとをき昔を

弘長元年百首歌奉りける時懐旧

前大納言為家

みしよの夢のさめぬまへよおもひわひは寝覚の程のむしもなかなかおもしろくと

前大納言伊平

すへしよれ昔をとひし秋の暁きくかのなきものなし

権大納言経任

つへてもかはりし袖のぬるゝ昔みよと思ふ涙なり

遊義院御時法師のいとこにまかりてそ給ける歌や

里わかぬ月のひかりまさりてみえけることをおもひて
よみ侍りける　皇太后宮大夫俊成
いにしへの雲ゐの月ハそれなからやとりし水のかけそかはれる
題しらす　信實朝臣
道とはなかりしにしてよへともみよにわすれぬ月のかけかな
素暹法師
袖ぬれし昔の夢のなこりとて老の涙にぬるゝ月かけ
侍従能清
夢とても今ハ人にまたこそしらせ後のよのこゝろもしつと
うちへまゐりてそのゝち家勝金剛院の八講
にまゐりて前中納言定家のもとにつかはし
ける　前内大臣基
数ならてそのかみ夢のこゝろのみしのふはかりとふ人もなし
中務卿宗尊親王家百首歌に
前左兵衛督教定
きえやらていきけることも夢ならは五十路のあまりのこるかなしさ
夢を　大僧正道寶
五十あまり秋よふけぬとおもふまにおきて夢をみるかな
花山院御製
なかれゆくのりのあとにはのこれとも世の中をと夢にみえけん

藤原隆祐朝臣

とはれぬの身をおもはしはしよかんら夢をはいきうかりしなみつともとも

従三位光成

みかりにはおもひもわかぬうつゝねの夢はさめてそおもふかり
せう

題しらす

前内大臣

ゆめとみぬ程をうつゝとおもひし夢の世をぬこてうきなれり

澄覚法親王

うつゝをも夢にもなかぬまよひのまそあさ世をたのむ歎くらん

僧正聖兼

よのつらし露くもまよおもふかよ夢の世ともおもひなりは世の

源親長

うきねの夢にもうとくぬれにける袖のなみに昔こふらん

往事如夢といふことを

従二位顕氏

別れにし一夜の夢ともみしとをおやみはさめてたえてなきさ

黄鐘調ことをもさせ給ふにおもひつゝよの
ありてよみ給ける

藤原為世朝臣

あからさまの秋のはさへ形見とてなにかひとの夢をそ
はる

題しらす

侍従能清

たゝちなのゆくゑはあるへきうきゆへそとおもふまつまてねそぬ
しき

前大納言為家

なからへて若葉の下とも頼もなすあはれ世なかにはまれなりけり

鴨長明

いかにせんはかなの蛍はまなくして立のかるへきあともなきこと

皇太后宮大夫俊成女

月をへてあはれぬ命はさえぬまとなき物まてはわか悲

文集　逝者不重廻　存者難久留　といふことを

前大僧正慈鎮

この世にはこそひかしぬ別路にとてゆく人のなきそかなしき

後の世はさらにかはらんと

前大納言光頼

形見とてをりくことにかへる袖は涙の玉はかけしなかりけり

ゆふけちとまれかくすなつしまはる々条太皇大

后宮かくれさせ給ひて　圓融院御製

今こんといひしにそへて白雲のやとりと別なりけれ

法成寺入道摂政かくれ給ひける又の年の春上

東門院より法成寺にまゐらせ給ひて

権大納言長家

めくりあふ春の光とたのみてとはるにかへてわか袖はかわかす

信実朝臣身まかりて後春の比かの墓所に

まかりたりけるに草はあをくなりにけりとて

よみ侍ける　　藻壁門院少将

年へぬる宿の草にもなくさまてうれしく人の袖を忘れく
なき人のうへおきて侍りける梅も咲けりけるを
色も香も昔なからやなき人の心とゝめし宿の梅かえ

題しらす　　よみ人不知

春ことに見なれし人の面影をと思へや花のちるらん

堀河院かくれ給ひてのちあまたの春を隔て
後花見けるに女車より歌を送り侍ける返
るなり

権中納言俊忠

思ひきやちりはしものゝ昔とてこそ春はさへかはらんものとは

九条太政大臣身まかりて後花をみてよみ侍
ける

普光園入道前関白左大臣

おもふにもよそへて見し人とのみはたつゝ我なからかな

題しらす　　権中納言国信

みくつきし春をなふとてたれむかし人わかれしよりそかはるらん

藻壁門院かくれ侍りてのち五月晦
大納言通方もとにさきける花を紙のはしに
て民部卿典侍もとにつかはしけるとて
光明峯寺入道前摂政のもとにつかはすとて

後堀河院民部卿典侍

さいはひや光枝のことくとなふれは法のむしろとは

返し　光明峯寺入道前摂政左大臣

きみまそに露の命は消やらて法のむしろにみちそ成ぬ

るかしとこそて民部卿の典侍にまつりける

大納言通方

今日よりそ法のことそ始まる法の花の露のよすか

藤原光季朝臣身まかりて侍りけるころ

はなのこそまて　前内大臣　師

露きえし後世へとや植をきし法の花そふ摂政かな

これをみて侍りける光明峯寺入道前摂政の

墓所にて読侍りける　九条前摂政右大臣

衣あり草の陰にも志る露の袖へしとふかさりきん

秋のころ人の身まかりにけるを歌てよみ侍りける

近衛関白左大臣

なきそむ妹のむくひとたひ今なき法まそ袖はぬれけり

綜閣の年の妹の羽衣よ春福に流れて

ましける前栽よ蘭の花をみてみえけると

おりてくれまつりける

皇太后宮大夫俊成

なへて世のうきとふみをも寄せて露なき宿にともなく

光俊朝臣身まかりて後人のよみて侍ける
なかに　法印定為
とへさ消はてぬの秋風に淀すてふもとこの露
悲しらす　よみ人不知
なき人をと思ふの露に袖ぬれておもひゆかれ秋の月をみ
道助法親王かくれ侍りける比経家法師かもと
に遣して侍りけるに
僧正實瑜
形見とてなかむかりしにおもへそ月の影をとゝめん
堀川院かくれさせ給ひて後の秋月あかき夜權
中納言師時もとにつかはしける
權中納言俊忠
この秋は過にしみをも忍ひてそ我ことあはれ月とた（ます）
返し　權中納言師時
君こふる涙に月はみえねとも面影のこそ立もはなれね
九月廿日小二条太皇太后宮にまいりあひ
て前大納言公任につかはしける
法性寺入道前摂政太政大臣
君のみや昔をとふらそ思ふらんわかみる月もおなしことそと
返し　前大納言公任

今は見る面影をたのむかな雲かくれにし月を恋つゝ

秋の比母身まかりにけるによみける

権大僧都定円

とはれつゝ袖はかはかしやらす見しよは露の秋のわかれは

人のなさけ深く侍る時あるとおもひてよみける

右近大将通忠女

袖ぬらす昔かたりの涙かなそふ人なくてわかれぬる

堀川院かくれさせ給て後五節に参りてしき

つきて皇后宮に候て侍りけるによみ給

けり

堀河院中宮上総

おもひきや見しにかはらぬ世をよそに人のかたちをかはらせて

返し

権中納言師時

かゝぬよの昔なからに逢人ハ見し面影を恋ぬ日そなき

待賢門院かくれさせ給ける後のかたにやまさ

の御事ともとこそえきる日雪ふりけるにさ

きしまゐりし人も見えけるまゝに三条内大臣

左衛門督にて侍ける時あはれと申とてかれ

けるにつかはしける

堀川

誰とみむ空に昔の見し人はなき空まて消ぬ思ひと

九条太政大臣かくれ侍て月の比申し侍よまゐる給

雪ふくつもりたりけるに右近大将忠基もとに
につかはしける　前大納言為家
いにしへの昔にかへるとおもはなんこゝろのかけの庭の雪
返し　右近大将忠基
思ひすまするよの猶庭の雪に跡と昔と思ふもとは
父基経身まかりて後雪ふりける日その墓
所にてよめる　藤原基隆
ふりまかふ跡もとふとし道なれ昔は上まて埋む白雪
雪の朝父か墓所にゆかりとてよめる
良心法師

雪ふかき苔の下にもさこそはといひし人の跡やまよはん
従一位倫子身まかりにける年の十二月中
原の花かりけるにつかはしける
信実朝臣
よのつねの花の暮そとなけきまし哀なからの日数なりせは
母のおもひにてよみ侍ける
前大納言忠良
はかなくて哀なしとたのまれて年の暮にそなれ
ともかくも母の身まかりにける時よみ侍ける
権大納言長雅

時のまもとこそや過し今はとてそむ絃のくもてそうつしき

少将内侍かんまうりきけるはよの菊けるうへの中

よ　藻壁門院少将

菊そとはさしかへしとはめやらぬんそなきおもひは絶

世中たらぬなくさこえけるは権大納言實國

りもつかしける　三條入道左大臣

あすしらぬ我身なきはおとろへてそ菊をとまれにをかさそつかさ

返し　権大納言實國

誰もけふうき世の菊とおもふらむ花をそのまゝ色かはるさ

養福門院よみ侍ける　皇太后宮大夫俊成

まそて日数のほどくるしきを菊をやなからとふかな

てみの日つかはしける　久我内大臣

きこゆるさこそはの菊のうつろふさとひあはせてもなくさめかね

返し　皇太后宮大夫俊成

われさへの秋はあはれきこんまいひあはせても菊ぞとぞ

ねやみ身はかりけるとふさりきる人のねやみ

歎つゝはつかはしける　権僧正永縁

我身こそなからへたりせんかのくものなとつくそあしけれ

覚しらす　清原定因

ころもにはなき人のことはてなき人のいはくまつりの宿さきむん

後白河院くらゐおりさせ給ひて又の年霜月にて
よはひかはりける日よみ侍ける
　　　　　禅空上人
めくりあひて我身よにふるなりけりまて思ひし月日は猶そ悲しき
養和のころ院かくれさせ給ひける比素服の人々あまた
まいりあひたりけるをみて皇太后宮大夫俊成
かもとにつかはしける　清輔朝臣
人ことにかはらぬ袖はかはれとも涙はおなし色になりにけるかな
返し　　　　皇太后宮大夫俊成
墨染のかはらぬ袖にかはるともふかき涙の程はしるらん

又光仲朝臣ゆかりにきはは袖の色ひとつに素服
着ぬと聞て遣ける　祝部成茂
限あれは我とはそめぬ藤衣涙の色にまかせてそきる
題しらす　　前大僧正慈鎮
ちかきにいひそてあえまてくれその世のかたみともおもひあはせ
藻壁門院かくれさせ給ける時人のとふらひて
侍けるに　　後堀河院民部卿典侍
夢の世にわかれて後のたのみさへいつの世まてと君にしのはん
従二位為継朝臣ゆかりある人のとふらい
かはりなるへきのちにかへりて侍ける返事に

安嘉門院大貳

なかしさはみをあらそひのはてもなしいつまでとてかくまちせむ

冷泉太政大臣身まかりて後よみ侍りける

常盤井入道前太政大臣

面影をとまさまんとおもふかなしさよりもあはれなれ

八条院御忌日に蓮花心院にまゐりて侍るに思ふことおほくてなかめくらし侍りけるに女房の中にかはしたまはせ侍りける

前中納言定家

老らくのつらさかは数そひて昔みしよの人ぞこひしき

なき人のふみを経のまへにしにかすとて

前大納言基良

形見とて今は涙の玉つさをかきやなかさむとこそなくさめ

前関白母身まかりて後前関白家に梵字をかきて供養し侍りし導師に侍るつかはすとて又の前後述大臣のもとにつかはしける

法印澄憲

見し人のけふもあはれはいかにせむ後むかしとやいはむとすらん

又前中納言定家家によみ侍りける家よりにて入道

うつりゆくてさそむかしとなるよにいきてしまらくとどまりぬる侍る

法印覚源

面影はあまた昔にかはりてもねやのうちこそそふく

父身まかりて後読る　平親清女妹

きのふまてなからんものとおもひきや別しまゝの心ありせは

仁助法親王三井にまうてゝくれ侍りしにさりて

いそきうしこえにゆくとてあふ坂の山にてよみける

津守国助

おもひやれさらぬたにこそ逢坂を別の旅はまよふこゝろとは

信生法師ともなひてはつまかりたまはりしに

まかれ宇津の山の本まてありてさらにつきて侍る旅

にては身はかはりぬれは都に独のかへり侍とて蔦

のしたに古郷を給へ　蓮生法師

うつの山うつゝにてえこそゆかはあやとみとやおもひのこさん

おもふにおもふ給はん法あるし猿なりきみの歌

あつ女の身はかはりなけりとさてなけき給はん

まつりしき　寂蓮法師

こそとひよりも都あきてとやひきねとやあらん

返し　よみ人しらす

都鳥さてとやひき夏の中とおもふ身すかそ嘆なれ

陽正平為営親王うれて後つきせさと思ひ歎き

てよみ侍ける

和泉式部

甲斐なくてさすかに見えぬ命かなと玉の緒によりは
思ふ事しける雨いみしう降ける日わつ
らひて侍ける人のとひけり

いつとても涙の雨はをやまねとけふは心の雲またに
なし

續拾遺和歌集巻第十九

釋教哥

花厳経の心をよませ給ける

後嵯峨院御製

昔の戸いましめやらすさそふ人あまねくは日影すゝ也

法花経序不来掌膽の心を

選子内親王

ぬる秋なくも法をとりてむかへともとる中にてとるみそき

十如是乃心をよみ侍ける中に如是性を

後京極摂政前太政大臣

はるかに生まこれならよしとみる山の端の月もてしまふ經

本末究竟等

前中納言定家

ときの露りも葉末ともしるものをひとつとも袖はぬれけり

止宿草庵

選子内親王

浅茅生やはらのよりさき末葉まてのこりの露のあまりやなき

前大僧正慈鎮

草の庵に年ふりぬるの心まて露かからんとおもひけるや

いつまてか法の外なる草の庵にしはしもやとる身とかならん

普門品

大納言公経

世をすくふちかひは誰もいさしらんおほかたをたのむ心さへ長き世

無上寶聚不求自得

皇太后宮大夫俊成

ゆきかひけるをさへて月影よりもわかぬ玉や袖にかゝりし

五百弟子品

祐盛法師

立かへりみすいつくや衣にかけし玉をしらまし

天台座主公顕

あはれとく宝の其よ今よりは衣の玉の光ともなれ

人記品

少僧都源信

いまへハかみのはまくらを思ひとし山のしるしそ今はやすらん

柔和忍辱衣　在原伊信朝臣

我為まもられとまもるのこゝろ衣これぬるやくもなからん

寶塔品　後京極攝政

いにしへも今もかはらぬ月影と雲ゐのよそになかめつるかな

提婆品　前中納言定家

りうめきのはちすの花はみちにまよはぬともよく岩門の

我不愛身命　權大僧都桑雅

消やすき我身にかへて惜むかな法の花ちる芝の露

寿量品　法眼源兼

世に入てきえぬるかひのありけるにつきせぬ月そ久しき

西行法師

鷲の山くもる心のなかりせは誰もみるへき有明の月

我実成佛已来久遠　思順上人

たえせぬとなき道に入ぬるみのつきせぬ種をしめせ

如是展轉教　前大僧正慈鎮

汲てしりいくそらの末の山の井に法の水をそたえせぬ

寅猴經云　己小罷我統加法自作自来

とそらとと　光俊朝臣

一枝も我やまちまてともなはん桜のつたへ

こさらしきれ中その法八十乃賀へし侍ける次に

釈教乃心を　　蓮生法師

法の花ひらくむしろにあひぬるは仏も我も八十の春にあひぬる

雙林入滅　　慈寛上人

きさらきや薪つきにし春とても行方の煙ハ霞なりけり

前大僧正慈鎮

いかにせんそのよの月そかくれにし鶴の林の梢の煙に

舎利講をおこなひ侍て　　宗深法師

わきまへん昔にあらぬ波もちらぬを法のまことなりけるあられ

舎利講乃次に　　後京極摂政前太政大臣

吹かへし鷲の嶺風にまかせても玉をとらるゝ衣

金剛般若経不応住法不応住非法乃心を　　権僧正実伴

人の身も我ともむなし空蝉の身のからをうき世とそはかなき

一切賢聖皆以無為法而有差別　　法印公誉

飛鳥河ふちせなかれの水も行衛世は変するかきりとそきけ

應無所住而生其心　　光俊朝臣

衣なり雲ゐと諸ともにおもはそ着るらん

三論三假九識假の心を

よみ人しらす

結出るや度月とおもひもとくはやむらん

檀波羅蜜を　参議雅経

星のよを諸る人の袖をは影をもまねく山のはの月

心月輪の心をよみて心海上人よつかはしける

按察使隆衡

胸の中にくもりぬ月にみちてそよき法とこそ見ゆる

返し　心海上人

胸のうちにすむ月影のかはる見にけきさみ法の心やなにおもふ

我教示中に　慶政上人

むねのうちにありとも見えぬ音にきくやとりし影の月

佛真法身猶如虚空應物現形如水中月

月といふ心を　大僧正道寶

みなそこの光をもやとるらむみちの水の月

譬如浄満月普現一切水の心を

よみ人しらす

けふまてもおもふにかはるやみもかけす月のすむこと

本源清浄大圓鏡の心を

法印覚源
くもりなき心の底をあらはさはさよりさよれ法のみち
妙観察智　法印良覚
それそれの心のちりまても定にしてこそあかす月哉
法印家信
さひしきもわれ人をすてゝはてはとさとりなやむらん
慶政上人よみ侍りける法花山寺にて人々す
すみ侍りけるに　前内大臣基
今は又わか身かたふく花のちしれ秋の白菊
法文の心を定季よませ侍りけるに
諸仏如来従一心出現無量阿僧祇仏刹と
いふこゝろを　法印良守
色くにうつる梢のもみち葉も志くれ雨て染むらん
法界唯心　前権僧正宗性
色もなき心のうちにわかれつゝむすはれてこそ錦なりけれ
空即是色のこゝろを　前大僧正道玄
春秋の花も紅葉もなかなかもむなしきそらのいろそまかはぬ
二乗成仏のこゝろを　法印定円
あやなくも初ねみのりとおもひけるかくふかきもはなれけれ
弘長元年百首歌奉りける時　秋教

衣笠内大臣

之ひとくぬるさえふうたしけれどあまのかはらもなし

観無量寿経水想観

後光厳院御製

水の面にうつりてすめる影にこそ見にうつる心なるらん

定散等回向速証無生身

権中納言経平

空の月影もれ花のかりくにすみてやかてたのまん

在世壽（韋）提滅後凡夫同般照摂取光明の心を

覚寛上人

なかもりくの心来の世を昔ながらにてすむ月かげ

九品之みのりの中に下品下生を

禅寛上人

夕日影さすとみえて雲まより西になびくも心そちりて

弥陀他力の心をよみ侍りける

信生法師

よるへには我とはさしもわたるまし小舟みちひく法の渡せて

日本往生伝を見てよみ侍る

法眼俊快

浮世には稀としもめしとこへともこの人数によそへつまし

月をみて　　少僧都源信

こゝやまにいく夜か月のまよふらんのまくにまよひゆくらん

安養即寂光乃心を　　法印定円

みなそこのこゝろもとかはひとつそ静なる光てらすありの月

於六道至定繳乃心を　　蓮生法師

六のみちはさためぬ物のゆくよまたなれとへといふつめきん

十界可ふみ得ても小人界を　　法眼源兼

うきことをきくらいの頼もしひかるをぬよそれたよみすまひゐ

高弁上人

りしはまりてすまつりけり

身きそ海とそれたよ寒遅あるもまよふんそ志るへなりける

行全法師

権教乃心を　　藻壁門院少将

いまゝへのみちこれといふかてもとうるきなれるみふるりん

藤原則俊卿

藤りありはなれ河のしおと分捨そよすまひ

天台座主公豪

たちとたち法すら光ともなき一方かぬ法のゆりつ決

寶治百首歌めしけるついでに寄燈

後嵯峨院御製

長夜の心のやみのしるべせよかゝげおきける法のともし火

あつまにて人のいのりし侍けるに程なく
ふり侍りけるを人のもとよりしるしありと
申しつかはしけるに　前大僧正隆弁

我つみの深さよしく老が身は世にふる雨とあはれみよ

後白河院かくれさせ給ひて又の年法花堂に
まいりて閑法年久といふことをよみける

祝部光仲

法乃為おりし昔にかはらねは中せぬまでも残しとぞ思ふ

累代の跡として修法導師にまいり侍りけると
思ひおきてよみ侍りける　法印聖憲

枯ぬへき法のことの葉末までも拾ぬめくみよいつか遂ん

一流乃書をうつさせ給とて

前権僧正成源

吾門のわか一筋もかきとめて名をさゝらまでも人よつたへせん

経よみしとてよみ侍ける

法印公澄

うきことも我ひとなられ来りけて名えんつくらん吾門の水

十戒哥中に不偸盗戒

前大納言為家

ぬしゝらぬ衣はかけし白波の立田の山の峯の越路

不邪婬戒

信實朝臣

山の井のあさき影みるかりにも人のまことはありとしらなん

続拾遺和歌集巻第二十

神祇哥

千五百番哥合に　後鳥羽院御製

ねかふにおもふ心を祈てし世々もしつかにみたらし河の月

大蔵卿有家

ゆふかけていく世へぬらん神風やいすゝの河のなかれたえせは

弘長元年百首哥奉りける時神祇

前太政大臣

神風やうちとの宮の宮柱ひさしき代々にあまつひつき

題しらす

卜部兼直

いさきよき志ろかね岩ねの鶴白髪みそきる拙は玉くしけ露

荒木田延成

めくりあふ山城のなかれはいし川清き昔に立返る

社頭月と云ことを

荒木田延季

行末まていく世へぬらんあさくまやみ山を照す榊の月かけ

神祇歌中に

前大僧正隆弁

神代より光をとゝめてゆくさきさへ鏡乃宮にすめる月影

法印行清

男山ゆくまてしるき神代の光とみえてすめる月かけ

石清水社歌合に社頭月

権中納言長方

神かきや世々にたえせぬ石清水月も久しき影やすむらん

題しらず

後嵯峨院御製

男山老て行ゆく契あれは猶ことしの秋も神やまもらん

正三位知家

そのかみやふりまさりぬる男山よはひ行末の行末をまて
いくしほの社にちかひありし時よまつせ

詠けり

太上天皇

石清水たえぬなかれは身にうけつ我世の末を神にまかせん

寛治元年十首歌合に社頭祝

入道内大臣

君のやくそてしるらん石清水のこゝろなかれの世々の末

寛治三年四月宗輔入道前関白後二条関白内大臣に侍けるをあひともなひて賀茂社にまうてけるときによみ侍ける

肥後

もろい草川つねさきふかいあさきとしも神もしるらん

本社に侍りてもしくはひけれは

賀茂氏久

君か世はけふをかへて榊葉の色かはらしと神やうけゝん

中納言に侍ける時賀茂の社にまうて侍ける次に侍の木の枝を折りて玉襷し侍ける後にさしおくるとて賀茂季保かもとにつかはしける

後土御門内大臣

ちはやふる神のみむろのことしけき榊の枝の折りそ手まね

返し

賀茂季保

神よりもわかのとかさきし榊葉のときはかはらぬ色にさくらん

社頭花といふことをよめる

賀茂久世

神かきにさくてふ花もさそひてしまつ風おさまれと代とそ祈る

影しらす

後京極摂政前太政大臣

ちはやふる宮ゐうらうら神しあれハ松さかりにそ天のしたかな

後鳥羽院御製

思ふ事神まそ知るやさりともとみかさの山のありあけの月

光明峯寺入道前摂政家八月十五夜哥合

名所月

従三位頼範

春日山峯の榊もときはなる御代の光を月にみえて

神祇をよみ侍けるに

中臣祐賢

くり返し九千さの杜よりしめなはのかきめくりてもと祈るかな

前内大臣公

三笠山あふきてしるよ春日なるふりぬる身にも入神のめくみを

前内大臣師

神ことに秋とのこゑみかさ山をそなたの我身なりとも

前摂政太政大臣

くもりしとおもふよつきてたのむかな三笠の山の峯の月かけ

弘長（安）元年十月春日社にはしめて御幸ありし時まいりて奏し侍ける

内大臣

時あらはくもりぬ三笠の松の枝にみえつる御幸そ色そかけ

春日の宮神主にて久しくつかへまつりしことを
おもひてよめる　　中臣祐茂

霜雪をいくへてまつへきそもちみかさの山にふる

神祇歌の中に　　山階入道左大臣

ちはやふる神のみ山の峯におふる松そ神代のしるしなるらん

大原野祭にまゐりてよみ侍ける　　周防内侍

木枯も心してふけしめのうちはちらぬ木の葉そ大原の山

社頭松といふことを　　後徳大寺左大臣

住吉の浜松かえに風ふれは浪のゆふしてかけて（しらゆふ）

家百首歌中に神祇
後法性寺入道前関白太政大臣

波のうへにしてゆふかゝる住吉の松こそ神の榊なりけれ

住吉にまゐりてよめる　　西行法師

住吉の松のねあらふ浪の音を梢にかくる沖津しら浪

弘長三年内裏にて宮松といふことを
つかうまつりしに　　前大納言良教

住吉のなかきしるしは松のえに神代をかけてみする白浪

小寿の数を松にそへよつもりてたえせぬ代よりまもる神代に

世ふりて常盤井入道前太政大臣のもとへ
つかはしけるを見て後によみてつかはし
ける

津守国平

住吉の松にかはらぬ葉にかけて神代の世を神やまもらん

上東門院住吉乃社にまうでさせ給ひけるにともに
まいりてよみ侍ける

権大納言長家

住よしの岸ふかくとゞめつる千とせを世々にそへつゝ千年なる也

日吉社に御幸の時よませ給ける

後醍醐院御製

たのもしく我世を神に契りおきて代々ふかくそむかしきこえ

前大僧正道玄日吉社にて人々によませ侍し
歌二十一首の中に　山階入道左大臣

天てらす神をも日吉にあらはしてそむくまじき世を守るらん

うまつることよみ侍ける

天台座主公豪

日吉とてたのむ光はくもりなきてらすさかゑてらさん

神祇歌の中に　慈覚法親王

曇なき日吉のかげとたのますはそれとも世のやみを照さまし

ひめかれとにありて社のまへしらむをせきとゞめ
ふるとしのをまつりて坂本社にまうでて侍る

祝部成茂

いさきよき心をのへて照すなるくもらぬ神の光なりけれ

大宮にまうでて奉りける　権少僧都良仙

霧はれし鷲の高ねの月かけを日吉の宮にうつしてそみる

客人宮にて花のちりけるをよめる

よみ人しらず

いにしへのちかひおもへて山桜今もかはらす雪とふりつゝ

文永元年十月後嵯峨院日吉社に御幸あり

ける日雪のふりけれはよみける

祝部成良

神かきや君か御幸にあとしめてさかえん松は千世のさかへて

三宮乃本地の心を　祝部国長

末の世にちりにまじはる光こそ人をまもりてちかひなりけれ

題しらず　賀茂氏久

君か代を神やまもらん人のためしめかけにけりなかき我命なる

紀淑文

御幸するみちにも見ゆる松かえに今は世の風の神さひにけり

宝治元年十首歌合に社頭祝

入道右大臣

神かきにふるき風のこゑにかはらしとときはなる世を

神祇のこゝろをよませ給ける

太上天皇

今も猶久しき御代はちはやふる神のみことの代々をまもりて

誓しらず

前摂政太政大臣

世やはなき民ゆたかにと祈るをはまもてそ神は守りて

右兵衛督基氏

千早ふる神の三室よ祈おく万代まてといのるかひなき

後嵯峨院御製

榊とる手にまかせつゝしらぬ神のこゝろなる我國ぞとは

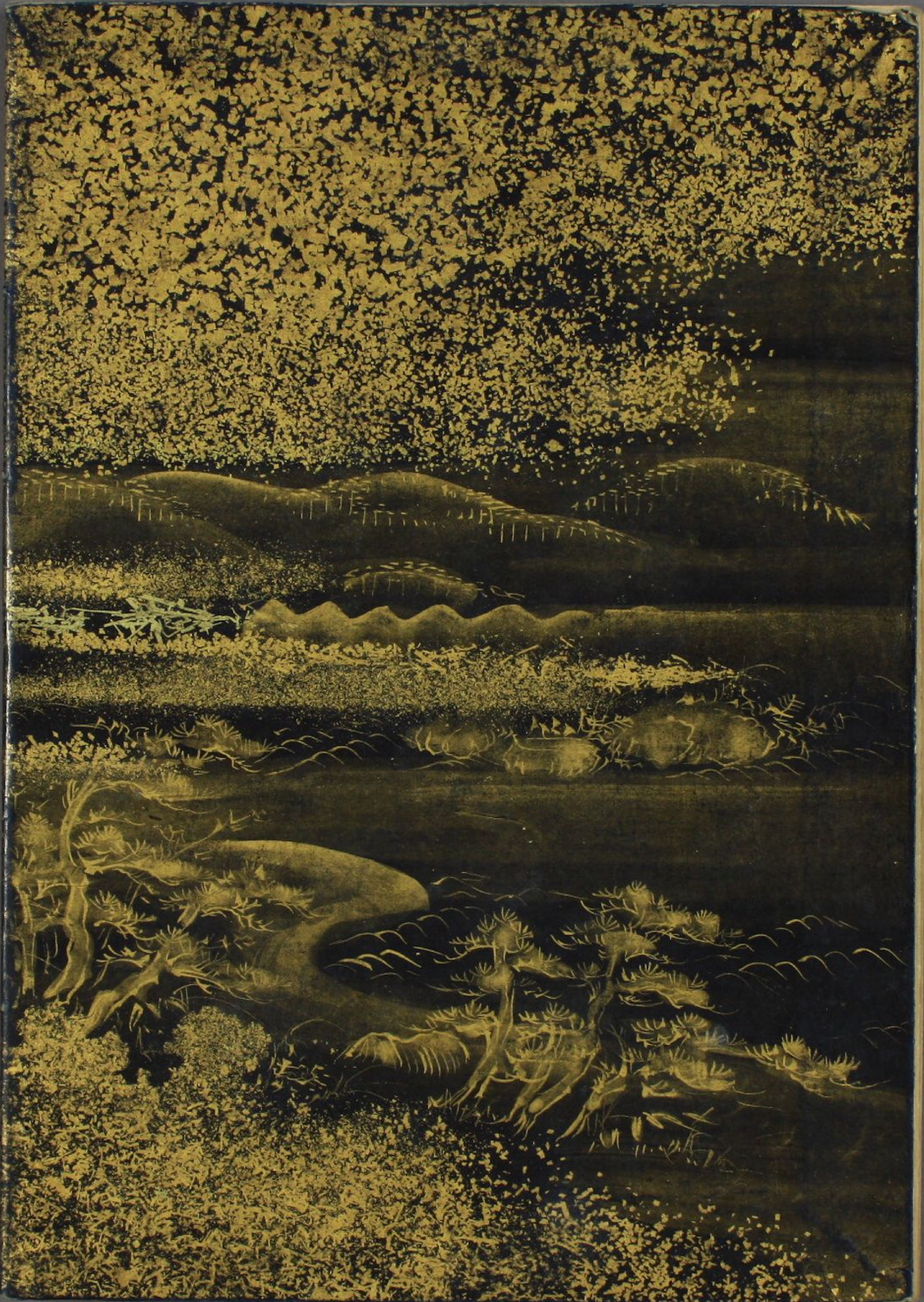
弘長元年百首奉りける時神祇

前大納言為家

榊葉のかはらぬ色にとしふりて神代久しきあまのかく山

熊野にまうでさせ給ける時いはた河にてよませ給ける

花山院御製

いはた河まことの心のふかけれは神もあはれとたのみはかめや

以下
3丁
白紙